【令和３年度第２回チーム向け研修資料】

津久井やまゆり園における
意思決定支援の取組み

～意思決定支援の実践～

令和３年10月28日

意思決定支援専門アドバイザー　冨岡　貴生

（NPO法人　かながわ障がいケアマネジメント従事者ネットワーク　相談役）

意思決定支援は今に始まったことではない！

- 人は豊かな生活を送りたいと誰もが願っている
- しかし、抑圧された環境に置かれると、無力（パワーレス）の状態に陥ることが多い（ソロモン）
- 施設や病院など、狭い空間で介護や治療を一方的に受けるだけの環境に長い間いることで、起きやすい、無表情や情緒不安定、社会性の低下など心身の症状がでやすい（施設病）
- 本人の意思は、支援する人と環境に影響される（「状況の中の人」：ホリス）
- 利用者の意思を重んじることから支援は始まる（本人中心・権利擁護）

社会生活支援について

- 人は社会的な存在であり、一人で孤立して存在しているのではありません。人との関係の中で存在しています。
- どこで生活を送ろうとも、自分のことは自分で決めていく、人生の主人公として歩み続けていくことに変わりはありません。
- 利用者の意思を重んじ、人とのつながりや地域資源を活用することを、どの生活場面においても支援していくことが求められています。

「楽しい」ことは「楽」ではない

・・すべてが「YES」ではない・・

①生活の安定（支援）

生理的欲求→安全欲求→社会的欲求→承認欲求

- 生活
  役割・関係性
- 活動
  役割・関係性
- 社会
  役割・関係性

「楽」ではない

②生活の質

自己実現の欲求

- 興味関心
- 豊かさ

「楽しい」

③豊かさを感じる心

豊かさを感じる心を育む

- 目の前の利用者が発する言葉に耳を傾け、寄り添い、伴走しながら支援を行なうことで、信頼と安心の中で、豊かさを感じるゆとりが生まれてくるものかと思います。

意思決定支援と誤解

- 不安定な状況を改善するためのものではない（結果として安定することはある）

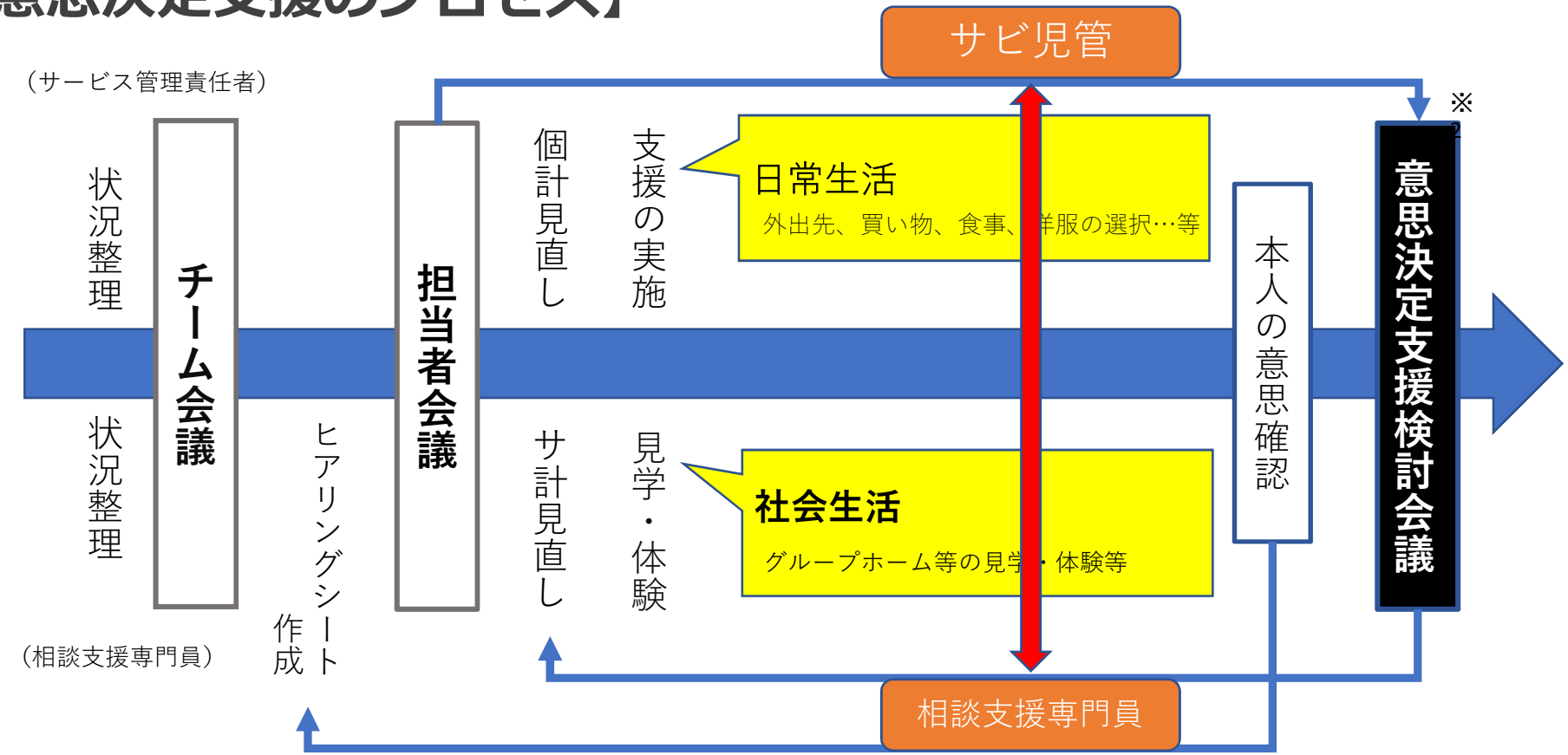
- 不安定な状況だからといって意思決定支援をしなくても良いということではない（不安定なことへの支援と意思決定支援は別のもの）

- 施設からGHに移行することが目的ではない（どの生活場面でも利用者の意思が重んじられた支援が行われなければならない）

意思決定支援のプロセス

平成29年度から、全ての利用者を対象に、
意思決定支援チーム※1で、このプロセスを丁寧に繰り返している。

【意思決定支援のプロセス】



※1 意思決定支援チーム：相談支援専門員、サービス管理責任者、園職員、市町村・県職員等で構成するチーム
※2 意思決定支援検討会議：上記に加え、本人・家族、意思決定支援専門アドバイザーが参加し、本人の意思を確認する会議。

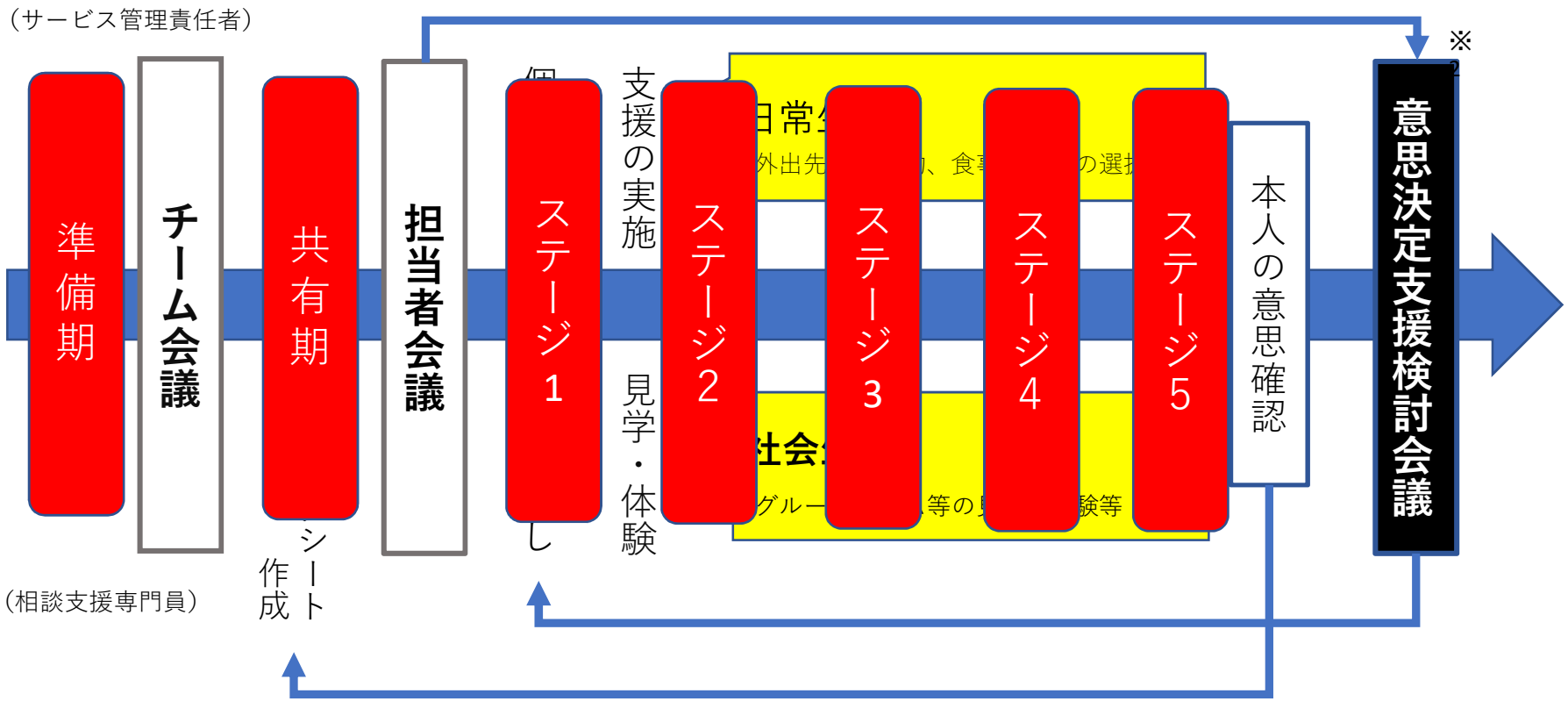
意思決定支援を始める上で
支援チームの形成

- これまで施設内での支援が中心で、相談支援専門員等関係者がかかわることが少なかった。
- 多くの関係者と連携して意思決定支援を進めていく県の考えに戸惑いや抵抗があった。
- 意思決定支援を行う上での共通理解を図るため、意思決定支援ガイドラインの理解を深め、利用者の意思形成・表出方法、対人関係のとり方、興味関心等について、ヒアリングシート（アセスメント）を活用し、利用者を理解することに努めた。

津久井やまゆり園での意思決定支援の実践

平成29年度から、全ての利用者を対象に、
意思決定支援チーム※1で、このプロセスを丁寧に繰り返している。

【意思決定支援のプロセス】



※1 意思決定支援チーム：相談支援専門員、サービス管理責任者、園職員、市町村・県職員等で構成するチーム
※2 意思決定支援検討会議：上記に加え、本人・家族、意思決定支援専門アドバイザーが参加し、本人の意思を確認する会議。

事例概要

- Iさんは、ゆったりとした生活を好み、言葉での表出がなくても、指差しや「あー」と声をあげて意思を伝えることができる、最重度知的障害の40代の女性
- 事件後、生活が豊かさに重きを置いて、余暇の充実、外出等を繰り返してきたまた、グループホームの見学、体験利用にも取り組んできた。
- かかわりが増えることでIさんの行動には意味があり、意思を汲み取れるようになっていった
- 支援チームは「GHでの生活が相応しい」と感じてはいるものの、Iさんから明確な意思が聞き取れないことから、チーム内から不協和が出始め、居住の場を決めかねている事例

Ｉさんの基本情報

対　象　者：Ｉさん　女性　40代
援　護　地：〇市
主たる障害：最重度知的障害
障害支援区分：６
親族関係：成年後見人
移　　動：自立
特　　徴：発語がないが指差しや「あー」
　　の声で意思表示
既　往　歴：花粉症

支援チームメンバー

- 相談支援専門員（チーム責任者）
- サービス管理責任者
- Ｉさんの担当支援員
- 後見人
- 〇市ケースワーカー
- 基幹相談支援センターの相談支援専門員
- 神奈川県職員

準備期：意思決定支援を始める上での準備段階と支援チームの形成

- これまで施設内での支援が中心で、相談支援専門員等関係者がかかわることがなかった。
- 多くの関係者と連携して意思決定支援を進めていく県の考えに戸惑いや抵抗が強かった
- そのため、関係者が集まり、意思決定支援を行う上での共通理解を図るため、チーム会議を開催した
- 本人の意思形成・表出方法、対人関係のとり方、興味関心等について相談支援専門員、サビ児管がアセスメントを行い、本人を理解することに努めることとなった

準備期

- 意思決定支援ガイドライン及び意思決定支援の必要性を理解する
- 意思決定支援に求められる技術と支援方法を理解する（アセスメントを繰り返す（ヒアリングシート））
- 誰もが豊かな生活を送りたいと望んでおり、興味関心は経験によって広がっていくことを理解する
- 利用者にかかわるすべての人（組織も含む）が理解する

利用者にかかわる関係者は必ず意思決定支援の理解を深めておくことが必要です。また、時間がたつと理解が薄れていき、チーム間で不協和が生じるなどして意思決定支援が進んでいかなくなることがあるので、繰り返し確認することも大切です。

手掛かり・ヒアリングシート
（意思決定支援に必要なアセスメント）

- これまでの生活史、日常生活における利用者の意思表示の状況などについて、相談支援専門員、サビ児管、直接支援員が整理する。
- どのように生活を送ってきたか、何に楽しみ、喜び、興味を持ってきたのか、また、何が苦手か、嫌な体験などを知る（その場面が分かるような、具体的なエピソードを家族等から聞いていく）。

⇒意思決定支援の有効な手がかり、重要な根拠となる

平成31年5月　日ver

意思決定支援に係る手掛かり・ヒアリングシート

作成日:　　第　　版

利用者名:　　様

作成者:　　第　　期

望む生活	ご本人の意思:	
	ご家族の意向:	

基本情報（生活史、学校及び福祉サービス等利用歴（教育・支援経過）等）

生年月日:

援護地:

現居住地:

主たる障害:

療育手帳:

その他手帳

障害基礎年金:

その他収入:

障害支援区分:

生活史

（出生時～学齢期）

（学齢期以降）

現在の支援目標

（サービス等利用計画）

（個別支援計画）

（障害福祉サービス等の利用状況）

生活環境

（現在の生活環境、日中の過ごし方）

（必要な環境への配慮、医療情報等）

家族関係

家族構成（ジェノグラム）

主たる家族等氏名・続柄	
成年後見人の氏名・類型	

社会関係図（エコマップ）

友達	

ADL

食事:

排せつ:

睡眠:

入浴:

整容:

更衣:

移動:

起居・移乗:

その他:

（IADL）

食事の準備:

買物:

掃除:

洗濯:

金銭管理:

服薬管理:

交通機関の利用:

電話の使用:

書類の記入:

趣味:

余暇活動:

その他:

領域別のアセスメント

手掛かり・ヒアリングエピソード	好き・喜び・楽しみ	意思能力・表現方法等
（出生時～学齢期） （学齢期以降） ※自宅、学校など障害福祉サービス利用時以外のエピソード ※以前利用していた障害福祉サービス利用時のエピソード ※現在利用している障害福祉サービス利用時のエピソード ※エピソードが右記のどの項目の根拠となっているかがわかるように、次のとおり文頭に記号（複数の項目の根拠となる場合は複数の記号）を付してください。 **好き・喜び・楽しみ：○ 、 嫌い・苦手・不快：× 、 意思能力・表現方法等：■** ※スペースが足りない場合は、別紙に記載してください。	嫌い・苦手・不快	主張： 拒否： 柔軟性： 言語的理解： 視覚的理解： 表情： 言語： 表現：（表情・言語以外） コミュニケーション手段： 言葉等への反応： その他：

上記のことから、推定されるご本人の意思（望む生活）

ヒアリングシートのポイント

①生活史から紐解く（本人を理解する）

・　生活史の中から興味関心、喜び悲しみ、意思の表出方法について、幼少期等のエピソードから理解を深める。

・　家族が担ってきたことを深く受け止める。

②判断能力意思表出に着目する

・　施設での生活の中で、行動の意味は何なのかと疑問を持ちながら接する。

③本人の意思を感じ取る

・　相談支援専門員は本人と接する機会を増やし、感じ取る（とても重要）。

④相談支援専門員、サビ児管がそれぞれの立場でアセスメントを繰り返し、共有する

・　二人が中心となってチームを作り上げていく。

アセスメント：好き、喜び、楽しみ

①「おかあさんといっしょ」のTVが好き

②コーヒーが好きで、自動販売機の複数ある中からコーヒーを選んで購入している

③入浴時はゆっくりと湯につかり、満足いくまで入っている

④一人で座布団に座り、手ぬぐいを持っていると安心する

アセスメント：嫌い、苦手、不快等

- 橋や高いところが苦手
- うるさい場所が苦手
- 花粉症の時期は機嫌が悪い

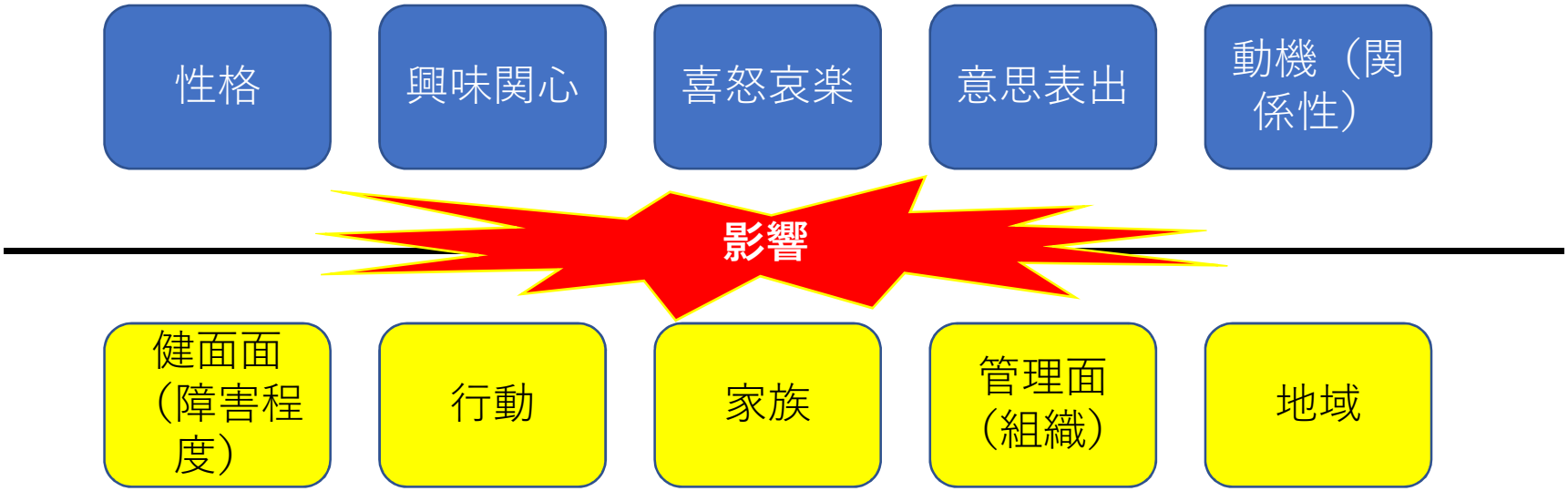
共有期

・日常生活場面での意思決定支援であればサビ児管が中心となり、社会生活場面では相談支援専門員が中心となってチームアプローチを展開していきます。

- チーム（関係者）と共有

→家族、チーム関係者、事業所の理解と共有

＊チーム一体となって意思決定支援を行う



共有期のポイント

- 利用者支援にかかわる関係者が意思決定支援を理解する（ガイドラインの遵守）
- ヒアリングシートでの情報をもとに、利用者の全体像を理解する
- 意思決定支援はチームで展開されていくことを理解する

行政・医療、教育、福祉等様々な職種が一体となって意思決定支援が行われますので、共通理解のもとで支援が行えるよう情報を共有しておくことが大切です。なぜなら、職種によって、学んできた環境が違うため、ニーズの捉え方や支援方法が異なるからです。

ステージ１（やり取りを増やす）

〇ヒアリングシート（アセスメント）の情報と実践をつなぎ合わせる

・アセスメントから得られた利用者の意思表出等を意識する

普段の何気ない行動にも利用者の**意思を感じ取れる**ようになる

〇興味のあることを日常生活に取り入れる

・利用者の興味があることをヒントにして支援を行う

本人の表情・発言・態度等から**新たな気づきを得る**

相談支援専門員、サビ児管の役割が異なることから、それぞれがアセスメントを行い、利用者とかかわりながらアセスメントを深め、互いに共有することが必要です。

ヒアリングシート：意思表出や表現方法

①欲しいものに手を伸ばしたり、指差しや「あー」といって意思表示する

②意に添わないときは、「ひー」と声をあげ、顔や首をさする

③強い拒否や不安な時は、壁や床に頭突きする

④調子が良いときは、Ｉさんが好きな支援者に頬と頬を合わせてくるなどのスキンシップを求めてくる

⑤簡単な日常の言葉を理解している様子

アセスメントでの気づき

- サービス管理責任者（支援担当者含む）

Ｉさんの選好や意思表出方法をアセスメントすることで、行動には意味があること、経験を積んでいくことで行動の範囲を広げていく力を持っていることに気づいた

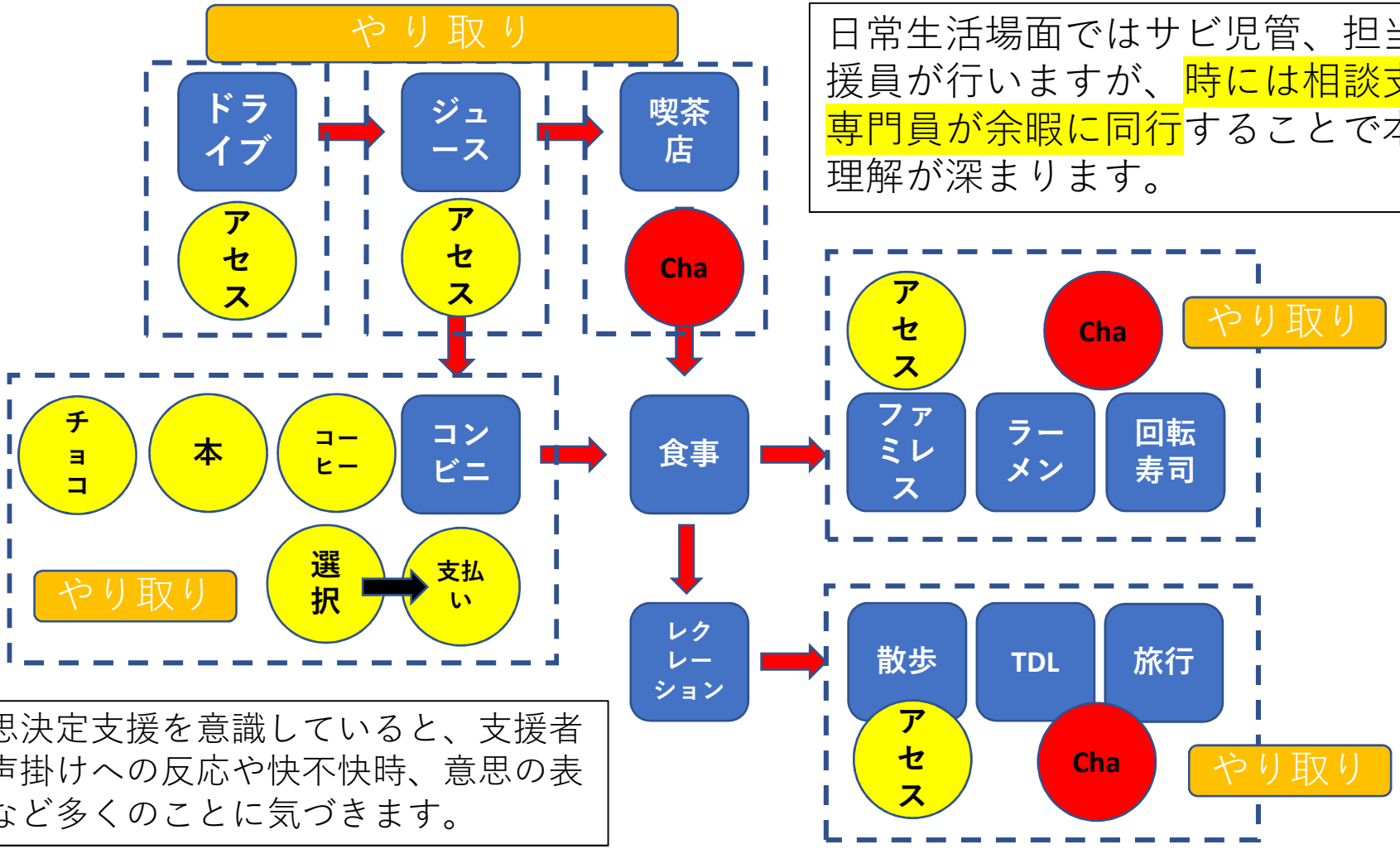
- 相談支援専門員

意思決定支援に必要なヒアリングシートを記入していく中で、“意思表出”と“特性を知る”ことを分けて表記することで、Ｉさんの意思能力を理解することができた

ステージ２

（興味関心等を生かし、日常生活場面の範囲を広げる）

やり取り→やってみる→新たな発見の繰り返し（楽しい・楽しくない・・）



日常生活場面ではサビ児管、担当支援員が行いますが、時には相談支援専門員が余暇に同行することで本人理解が深まります。

意思決定支援を意識していると、支援者の声掛けへの反応や快不快時、意思の表出など多くのことに気づきます。

意思決定支援の根拠となる記録の作成

「障害福祉サービス等の提供に係る意思決定支援ガイドライン」Ｐ８～９

- 　意思決定支援を進めるためには、本人のこれまでの生活環境や生活史、家族関係、人間関係、嗜好等の情報を把握しておくことが必要である。家族も含めた本人のこれまでの**生活の全体像を理解**（ヒアリングシートの活用）することは、本人の意思を推定するための手がかりとなる。
- 　また、本人の**日常生活における意思表示の方法**や**表情、感情、行動から読み取れる意思について記録・蓄積**し、本人の意思を読み取ったり推定したりする際に**根拠を持って行う**ことが重要である。本人が意思決定することが難しい場合でも、「このときのエピソードには、障害者の意思を読み取る上で**重要な『様子』**が含まれている」という場合がある。そういった、客観的に整理や説明ができないような**「様子」を記録に残し、積み上げていく**ことは、障害者の意思決定を支援する上で重要な参考資料になる。
- 　また、**意思決定支援の内容と結果における判断の根拠**やそれに基づく**支援を行った結果がどうだった**かについて記録しておくことが、今後の意思決定支援に役立つため、**記録の方法や内容について検討**することが有用である。

担当者会議を開催し、共有する

- 外出等までのプロセス（本人の反応）
- 外出時の様子（本人の反応）
- 支援者とのかかわりの様子（本人の反応）
- サビ児管とのかかわりの様子（本人の反応）
- 相談支援専門員とのかかわりの様子（本人の反応）
- 支援の状況に対して関係者の感想

相談支援専門員は、チーム会議を進めていく中で、チーム関係者の本人への理解が深まること、チームの凝集性が高まることを意識して会議を行った（会議に向けて、サビ児管、県職員と事前準備を入念に行った）

気持ちを感じ取ることの意味

- 買い物同行などのとき、本人が「ぎっちら」と発し、頬を重ね合わせてくる行為になぜか担当者は疑問を持った
- 本人に聞くが、応えることができない。しかし、笑顔で手をつないできて、頬を重ねてきた
- 支援員は、「Ｉさんにとって心休まる、楽しいひと時を思い出す言葉なのかもしれない」と感じた
- 記録を読み返すと、幼少期からの言葉で、母とのやり取りの中で発していたことが分かった

本人と母とのやり取り（想像）

本人：「ぎっちら」
母　：「・・・」
本人：「ぎ～っちら」
母　：「なによ、もう」
本人：「ぎっちら～」
母　：「まったくもう（手をつなぐ）」
本人：（ママ大好きと言えないが感情が高
　　ぶり）抱き着く

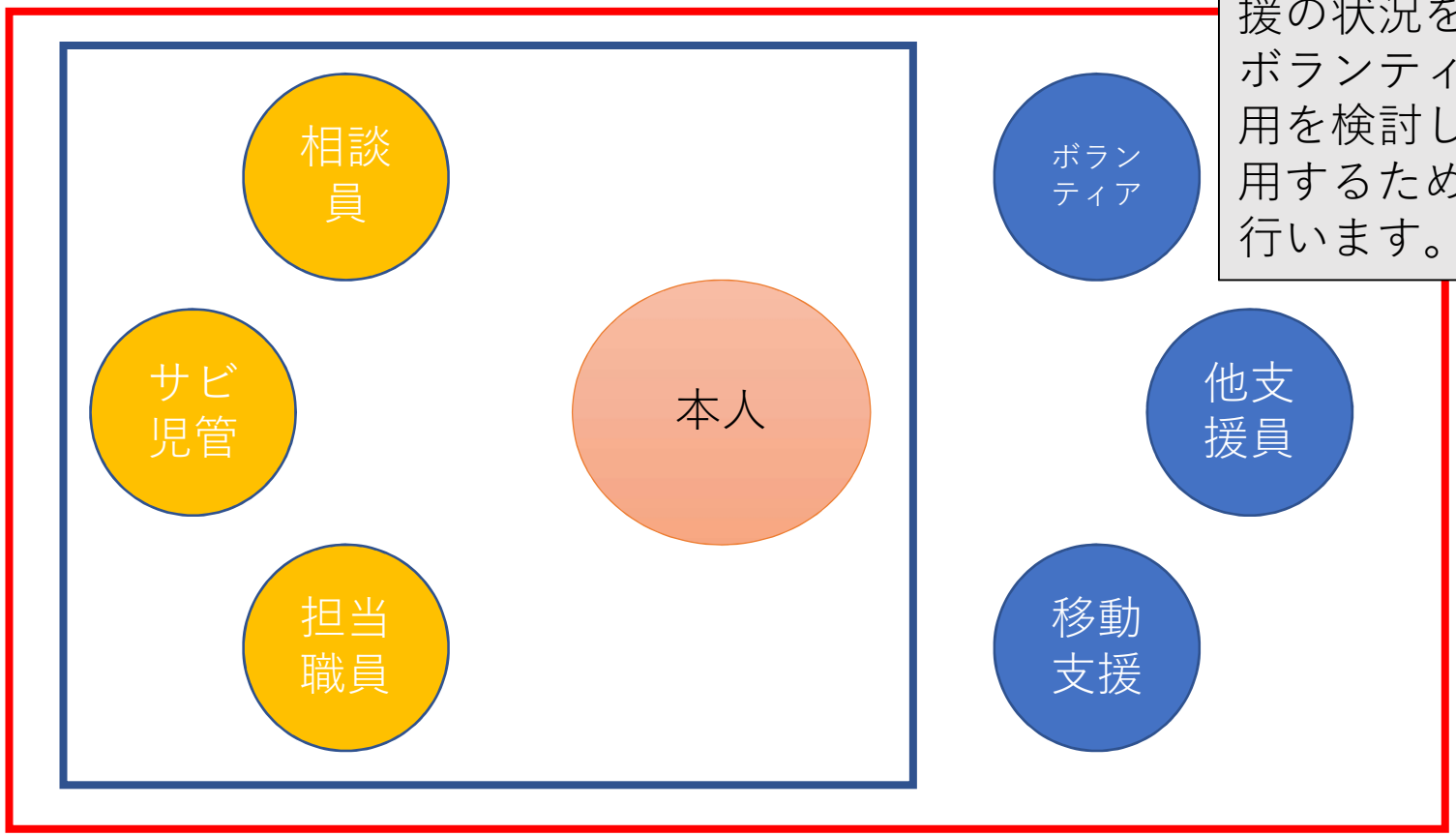
- 人は多くの人と関係を持ちながら社会生活が送られており、他者に影響を受けながら自分自身を作っていきます

- Ｉさんにとって最も影響を受けた母との関係にも目を向け、育ってきた背景を読み取る努力を続けていくと、些細な行為の中からでも自然と気持ちを感じ取れるようになっていく

ステージ３（事業所以外の人に依頼する）

本人の意思決定を支える人を広げていく

日常生活場面での支援の状況を踏まえ、ボランティア等の利用を検討したり、利用するための協議を行います。



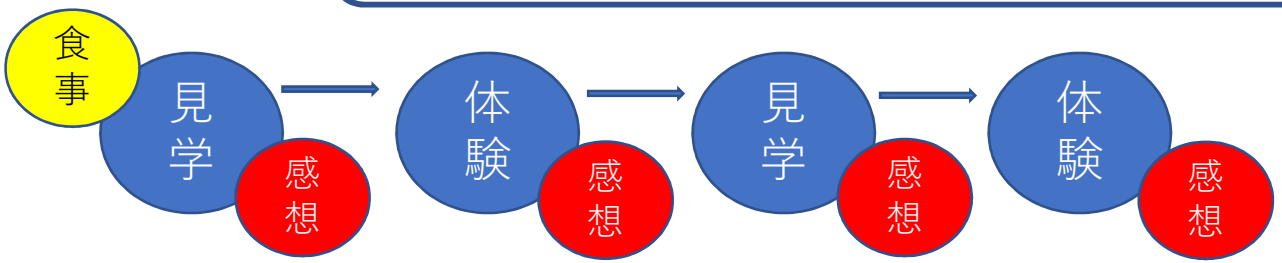
ステージ４
（家族も本人の意思決定を支える協力者）

- 意思決定支援の説明
- 定期的に外出時等の本人の様子を報告する
（事実だけではなく、写真なども見せながら
エピソードを伝える）
- 本人の喜ぶ姿を見るのは家族にとっても嬉しいもの（子供が大切にされていると感じる）

普段から利用者の生活の出来事（頑張ったこと、成長したこと等）を家族に話していますか？　もしかしたら、問題行動を中心に話しているということはないでしょうか。

ステージ５（見学と体験）

ステージ１	・行動から意思が読み取れる（新たな気づきの発見）
ステージ２	・興味関心を出発点として、活動範囲を広げていく（新たな気づきの発見）
ステージ３・４	・意思決定を支える人を広げていく（新たな気づきの発見）
ステージ５	・利用者の相応しい日中活動が見えてくる ・利用者の相応しい生活場所が見えてくる



グループホーム体験利用の様子

- 見学することを説明してもうまく伝わらないため、本人が興味のあることに重ねてやってみてはどうか（チームで決定）
- 外食を兼ねて（本人の好きなこと）、ついでにGHの見学を行うようにした
- 最初は緊張していたが、何度かGH職員と顔を合わせることで慣れていった
- 始めは日帰りでの体験利用、慣れてきたら1泊、2泊と伸ばしていった（施設を出る時の反応に注意）
- 始めのうちは、支援員が迎えに行くと走って駆け寄ってきたが、慣れてくると、リビングでくつろいだままで、声掛けによって帰宅する。
- GH職員から、穏やかに生活できていたとの報告を受ける

居住の場の選考にあたって

- GHの体験利用の様子から、チームは本人にとって、相応しい居住の場はGHだろうということが見えてきた
- GH利用に向けて準備をしていく段階になってチーム内で不協和が生じることとなった。
- 入所に比べて人手の少ないGHで大丈夫なのか
- 日中支援型の方が相応しいのではないか
- そもそも日中支援型のホームは〇市にはない
- 本人は本当にGHが良いと思っているのか、環境が整っていないことを理由にして諦めさせようとする

・本人の意思が１００％ではないことで支援者が不安になる
・それぞれの立場によって意思決定支援の差が生じる

支援に迷いはつきものだが

- 意思決定支援を展開していく中で忘れてはいけないことは、利用者の意思を重んじることであって、資源の有無を優先させてはいけない

・チーム内で迷いが生じたとき、意思決定支援ガイドラインを遵守
・今までの取り組みを振り返り、本人の反応から感じ取れた利用者の意思を思い出す
・チームの不安を共有し、ぶれることのないようにする
・うまくいかないことが失敗ではなく、やってもいないことが失敗である

意思決定支援に大事なこと

- 意思決定支援を展開していく中で忘れてはいけないこと

利用者の意思を重んじる（本人主体・権利擁護）

- 意思決定支援を進める上でも重要なこと

気持ちを察せるようになる（感じる）

- 今私たちに必要なこと

経験を積んでいく

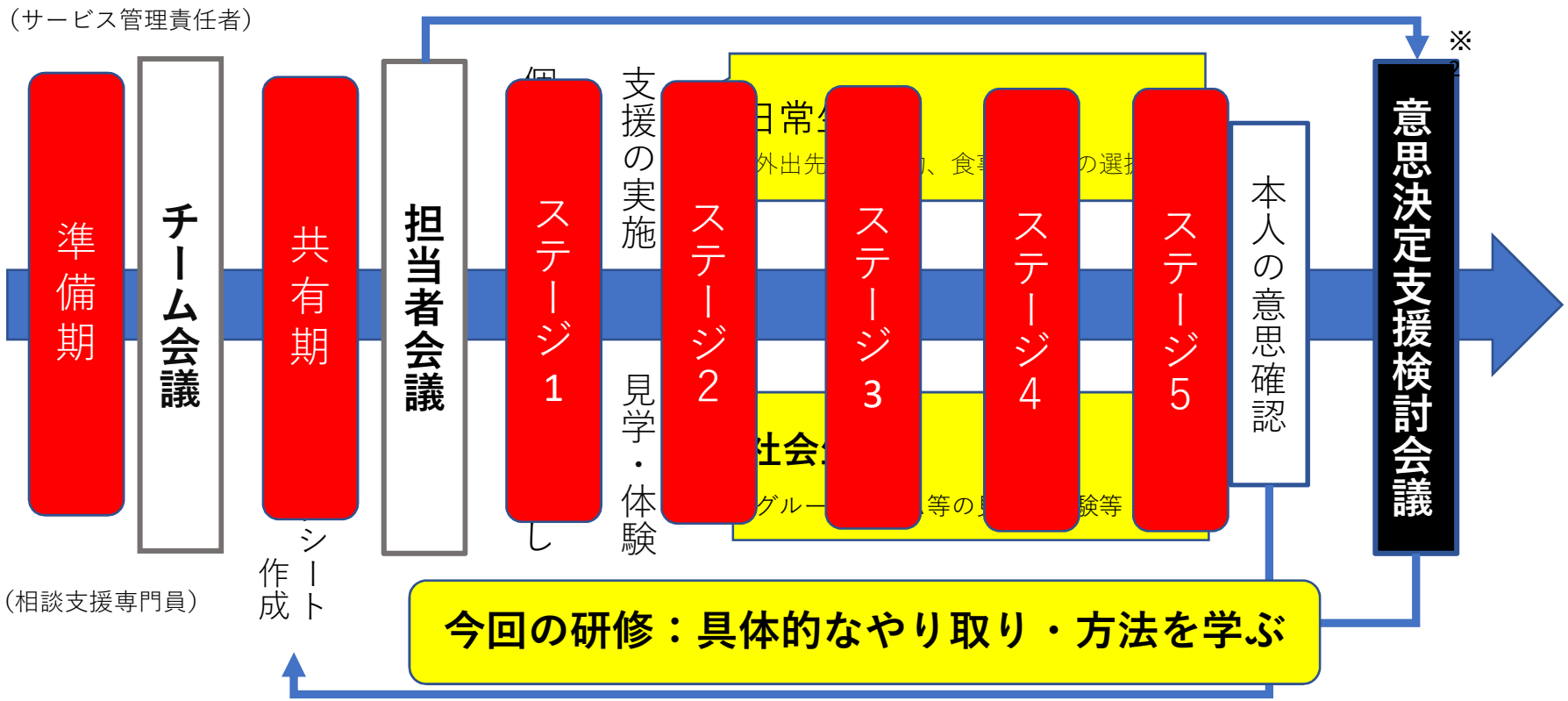
（幕間）３年間の実践を通して

- 支援員の勧めに応じて買い物に出かけていたのが、自ら要望するようになった利用者
- コンビニではいつも同じものを購入していたのが、支援員の勧めで買うものが増えた利用者
- マクドナルドに行きたい、横浜ベイスターズの試合を見たい、ジャニーズのコンサートに行きたいなど、興味の範囲が広がっていった利用者
- 施設内で支援員に見守られ、優しく声をかけられることで拘り行動が減少した利用者
- 個別支援は時として負担になることもあるが、それでも支援が楽しいと答える支援員
- 本人の生活の様子や可能性の話を支援員から聞いて、とても喜ぶ保護者

意思決定支援ガイドライン研修のポイント

平成29年度から、全ての利用者を対象に、
意思決定支援チーム※1で、このプロセスを丁寧に繰り返している。

【意思決定支援のプロセス】



※1 意思決定支援チーム：相談支援専門員、サービス管理責任者、園職員、市町村・県職員等で構成するチーム
※2 意思決定支援検討会議：上記に加え、本人・家族、意思決定支援専門アドバイザーが参加し、本人の意思を確認する会議。